PLAT CALENDAR

March 3

3［土］—**4**［日］市民と創造する演劇『とよはしの街の物語』◉PLAT主ホール
3［土］—**4**［日］ええじゃないかとよはし映画祭2018◉PLATアートスペース
8［木］—**9**［金］劇団四季『ジーザス・クライスト＝スーパースター』エルサレム・バージョン◉PLAT主ホール
10［土］クリエイティブアカデミー ダンス発表会◉PLAT主ホール
10［土］—**11**［日］PLAT小劇場シリーズ
北九州芸術劇場プロデュース『彼の地 Ⅱ～逢いたいひ、と。』◉PLATアートスペース
14［水］（株）さんぽう 進学相談会◉PLATアートスペース
16［金］石原詢子＆歌謡演舞一座響ファミリー 豊橋特別公演 歌と踊りの祭典◉PLAT主ホール
16［金］白井那奈＆長澤優花 連弾二台ピアノコンサート「デュオの世界へ」◉PLATアートスペース
18［日］第32回豊橋素人歌舞伎保存会定期公演◉PLAT主ホール
23［金］—**24**［土］『シャンハイムーン』◉PLAT主ホール
24［土］フェスティナ・レンテ ヴァイオリン発表会◉PLATアートスペース
27［火］—**29**［木］豊橋演劇鑑賞会 第265回例会 テアトル・エコー『もやしの唄』◉PLAT主ホール
31［土］「落語」＆歌謡トーク 天狗連 成田家紫蝶＆迷亭マウス◉PLATアートスペース
31［土］—**4/1**［日］CONTEMANSHIP KAJALLA#3『働けど働けど』◉PLAT主ホール

April 4

6［金］山崎由紀子ヴァイオリンコンサート◉PLATアートスペース
11［水］『赤道の下のマクベス』◉PLAT主ホール
14［土］はちまん正人 グロトリアンピアノコンサート スペシャルアンサンブル◉PLATアートスペース
15［日］第7回菜の花歌まつり◉PLAT主ホール
20［金］プラットワンコインコンサート竹田江梨子「グロトリアンで奏でるドイツ三大Bの響き」◉PLATアートスペース
22［日］平成30年度家庭倫理講演会「ともに生きる」◉PLATアートスペース
26［木］大学・短期大学・専門学校 進学ガイダンス◉PLATアートスペース
28［土］平成30年度東三河高等学校演劇文化発表会◉PLAT主ホール
29［日・祝］斎竹恭子バレエスタジオ第27回発表会◉PLAT主ホール
30［月・休］2018年度PLATプログラム説明会◉PLAT主ホール

表紙／「とよはしの街の物語（2017）」
撮影：伊藤華織
企画・発行／公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン／味岡伸太郎＋有限会社STAFF
平成30年2月発行 30号［隔月発行］

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2018年3月—4月
vol.30

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

プラットニュース

CONTENTS

表紙「とよはしの街の物語『はしっ子』」
2
INTERVIEW：1
「とよはしの街の物語」
ちょっと地味で豪華です。
糸井幸之介・木ノ下裕一
4
TOPICS
「赤道の下のマクベス」
記録する演劇。
鄭 義信・池内博之・平田 満
6
INTERVIEW：2
「彼の地Ⅱ～逢いたいひ、と。」
やはり人を書くことで街を描きたい。
桑原裕子
10
INTERVIEW：3
ナイロン100℃ 45th SESSION
「百年の秘密」
どうしても再演したかった。
ケラリーノ・サンドロヴィッチ
12
INFORMATION
PLAT主催公演情報
14
FOYER
ワークショップ
ファシリテーター
養成講座のこと
柏木 陽
ESSAY
平田 満のちょこっと エッセイ
「よろこび」
15
SUPPORT／TICKET CENTER
16
PLAT CALENDAR

市民と創造する演劇

「とよはしの街の物語」

3月3日[土]・4日[日]14:30開演
作・演出・音楽＝糸井幸之介
ドラマトゥルク＝木ノ下裕一
出演＝オーディションで選ばれた一般市民
会場＝PLAT主ホール

最初に、作・演出・作曲の糸井さんから木ノ下さんを木ノ下さんは逆に、糸井さんの紹介をお願いします。

糸井――木ノ下さんは、「木ノ下歌舞伎」という劇団を主宰され、そこで2、3年前、演出をさせてもらったのが最初で。特に昨年は豊橋で市民劇の『はしっ子』と木ノ下歌舞伎でも演出したので、自分の劇団員より一緒にいる時間が長かったかもしれません。木ノ下さんは、ドラマトゥルクといって、演出とは違った視点から、お客さんと演出の間に立って助言する立場です。性格も穏やかで常に冷静で優しいのですが、こと作品をとなると、とても厳しく、常に発破をかけてもらっています。

木ノ下――糸井さんは、「FUKAIPRODUCE羽衣」という劇団の座付き演出家、劇作家です。羽衣の作品は、妙ージカルと呼ばれる音楽劇ですから、糸井さんは、作曲と作詞も手掛け、公演によっては舞台美術もと、大変マルチに創作されております。僕が糸井さんの作品のファンで、人間の心の機微とか、社会の冷淡さとか、もしくはその中の人の暖かさとか。そして、その社会に映りこんでいる宇宙の広大さとか。そういった神羅万象を非常に繊細に、しかもダイナミックに描く稀有な演劇人だなと思っております。

市民の方たちと一緒にやることは、ご苦労も多いと思うのですが。

糸井――普段演劇をやってない方たちだからこそ、私の人間性が、コミュニケーションの面で問われる。心を開いて、一緒に作ることができないといけないと思います。今回はさらに出演者も増えて、劇場も広くなるので、私の未熟な面をできる限りなくし、人と向き合っていくことにチャレンジしないといけないなと思っています。

木ノ下――それは、糸井さんの謙遜で、市民の方には、僕たちが普通に使っている言葉が通じない。それは舞台の専門用語であったり、イメージを伝えるための独特な言い回しであったり、それらを市民の方と共有するには、とにかく対話しないといけない。そんな中で、糸井さんは言葉がとても巧みで。例えば「それはあと1秒遅らせて」とか、「もっと大きく」と言えば手っ取り早く済むところを、「まろやかにやってください」とか、解釈に幅のある言葉を投げかける。すると市民の方も、それは何なのかと考え、市民と演出家との対話が生まれる。これは市民の方を信じているからできることで、言葉数が多いわけではないのですが、やはり劇作家ですね、ポンと出す言葉が、現場中にフワッと伝わっていく。横で拝見していて、素晴らしいですね。

市民ならではの期待や面白さはありますか。

木ノ下――僕たちにとって稽古は仕事の時間ですから、日常とは切り離して考えがちですが、市民の方は、仕事をしたあとに稽古に参加し、生活と演劇が地続きです。だから、表現が「生」なんですね。技術とか経験値で処理しないという、生々しさはプロの俳優さんには出せないすごみです。糸井さんは、生身の肉体、なんとかさんという俳優が今ここで生きてお芝居しているという存在自体の説得力をうまく使う演出家です。市民劇はすごく相性がいいと思います。

「出演・演出補」として参加されている、深井順子さん、キムユスさん、とみやまあゆみさん達のようなプロの俳優さんに期待することはなんでしょうか。

糸井――やはり縁の下の力持ちではないですが、屋台骨を支えるようなポイントでやってほしいし、市民の方たちをまとめ、時には僕の意図をかみ砕いて説明してくれたり、落ち込んでいる人を勇気づけたり、逆に怒ったりして、大変助かり、心強いです。

木ノ下さんに改めて、ドラマトゥルクという役割をお聞かせ願えませんか。

木ノ下――創作を国作りに例えると、糸井さんが総大将、つまり国主です。そして僕が、どういう家来かというと、一つは総大将に「豊橋はこういう街で、こういう歴史があって、今からこういう国を作らねばいけません」と情報を集め進言する、学者的な役割。もう一つは総大将の、愚痴も悩みも含めて、相談役というか、いわば側近。そして、おこがましいですが、三つ目は軍師です。合戦（稽古）のときに、「こういう可能性あります」と、演劇という戦いに勝つためにこういう手段や兵器、作戦があると提案していく。総大将の力が最大限に発揮できる演劇作り、国作りをサポートする人という感じです。

ローカルとインターナショナルの関係についてお聞かせください。

糸井――「ローカル」なるものを突き詰めていくと、究極「個人」に行きつくと思うのですが、芸術作品を作る場合、作り手は自分自身の個人の世界に向き合っていかないと強い作品にはならない。でも演劇の場合は集団制作ですし、お客さんに見せるという社会的な行為でもあるので、どんどん個人の芸術では済まされなくなってくる。クリエイティブなローカルさと、たくさんの人とシェアするというインターナショナルな部分の、どちらも演劇は背負わないといけない。塩梅というか、その両方の調和が取れているのが、理想的かなと考えます。

木ノ下――例えば今回の市民劇は、ここでしか上演しないし、市民の方々が出演し、豊橋の街から受け取ったものを書きおろしている。でも、この豊橋だけで閉じられるのかというと、そうではなく、他の土地の方が観ても感じるところがあると思う。

それともう一つ、この市民劇の作り方自体が、とてもインターナショナルです。この市民劇は4年目だそうですが、市民の方はいろんな演出家と会い、表現の幅を広げ、みんな仲良くなり、ちょっと劇団っぽい雰囲気もある。その中にアーティストが入るという、この構築の仕方は、とてもいい。そんなふうに継続的に創作のシステムと市民との関係性を構築している劇場は稀です。

だから豊橋を参考にして、他の劇場でも、その土地に合わせた自分たちのローカルがもっと生まれてくれれば面白いですね。ローカルなものがインターナショナルになって、新たなローカルを生み出すみたいな。

最後に豊橋の方々へ期待が膨らむような言葉をお願いいたします。

糸井――劇場が広く、人も増えるので、初演時よりショーアップされますが、ただ豪華とは違う、ちょっと地味な豪華に期待していただけるといいかなと思います。

木ノ下――舞台の楽しみ方のひとつが、舞台上で行われていることの中に、「あ、分かる、分かる」「あれ、自分かも」とか。もしくは自分と近しい人の存在を発見したときに、一気に舞台と見ている自分との境界線が氷解する瞬間がある。これはすごく幸せな観劇体験です。『とよはしの街の物語』ですから、豊橋の方はもちろん、どんなところに暮らしている人にとっても、そういう作品になっていると思いますので、ぜひ会いに来てください。

豊橋で生きている人をしっかり描くことができれば世界中、生きている人に繋がる作品になります。

ちょっと地味で豪華です。

作・演出・音楽
糸井幸之介・木ノ下裕一
ドラマトゥルク

INTERVIEW:1

木ノ下裕一［きのした・ゆういち］／木ノ下歌舞伎主宰。1985年7月4日、和歌山市生まれ。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受けると同時に独学で落語を始め、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学ぶ。2006年に古典演目上演の演出や補綴・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。代表作に『黒塚』『東海道四谷怪談―通し上演―』『三人吉三』『心中天の網島』『義経千本桜―渡海屋・大物浦―』など。2015年に再演した『三人吉三』にて読売演劇大賞2015年上半期作品賞にノミネートされる。また、2016年に上演した『勧進帳』の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。平成29年度芸術文化特別奨励制度奨励者。その他古典芸能に関する執筆、講座など多岐にわたって活動中。

糸井幸之介［いとい・ゆきのすけ］劇作家・演出家・音楽家。1977年東京生まれ。2004年に女優の深井順子により旗揚げされたFUKAIPRODUCE羽衣の全作品で作・演出・音楽を手掛ける。全編の7割ほどを演者が歌って踊る、芝居と音楽を融合した独自の作風を“妙ージカル“と称し、唯一無二の詩的作品世界と、耳に残るオリジナル楽曲で高い評価を得ている。近年は、外部での脚本・演出・楽曲提供や、代表曲の一つ“サロメvsヨカナーン”がカラオケ配信されるなど、活動の範囲を広げている。多摩美術大学講師。

記録する演劇。鄭 義信・池内博之・平田 満

聞き手 編集者、ライター・大堀久美子　新国立劇場スペシャルトークイベントより

岸田國士戯曲賞、鶴屋南北戯曲賞、日本アカデミー賞最優秀脚本賞受賞の鄭 義信が、庶民の側から温かくも鋭いまなざしで世界を描く

作・演出　出演　出演

大堀――『赤道の下のマクベス』はシンガポールのチャンギ刑務所を舞台に、BC級戦犯として収容された日本人の軍人と朝鮮人の捕虜監視員が、ギリギリまで生きることに向き合った史実を通して戦争が引き起こす悲劇を描いた作品です。

日本での上演のために大きく筆を入れたことから伺えますか。

鄭――韓国での初演の戯曲は二度死刑判決を受け、それでも生き残った人の、現在と過去が同時進行するのですが、それから現在を切り、刑務所の中だけにして、登場人物も増やし、ラストも変え、まったくの新作と言っていい形になっています。

大堀――俳優のお二人は戯曲を読んでどのように感じられましたか。

池内――こういった事実を知らなかったことが情けなく、勉強不足だなと思いました。他人事ではなく、国を超えていろんな人に見ていただきたいと、心から思います。

平田――戦争は悲惨だとは思っていても、実感としてはどうか。戦争も知らないのに、演劇で演るのは、おこがましいと思うのですが、この作品に巡り会えたのは、きっと何かのめぐり合わせで、自分がそういう立場になったらどうだろうと、考えるきっかけになると思っています。ハードルの高い作品ですが、鄭さんの愛を信じて。男ばかりのむさ苦しいお芝居ですが、最後までまっとうできればと思っています。

大堀――書き上がった時、これまでの作品と違う手応えが鄭さんの中にも生まれたりされたのですか。

鄭――極限の、でも、その中にも懸命に明るく生きようとする人たちを描きたかった。見終わったあとに絶望感を与えるのではなく、「あぁ、明日は何かいいことがあるかもしれない」とか、「今を必死で生きなきゃ」と、感じていただければいいと思いました。

大堀――池内さんは台本を初めて読まれた時に衝撃があったと伺ったのですが。

池内――もどかしいというか、やるせないというか、どう発散していいかわからない。そんな気持ちになりました。僕の演る朴南星（パク ナムソン）という人は、僕だったらおそらくもう泣きじゃくって耐えられない。でも、強く生きている。だからこそ、この役を演る意味があるし、自分自身も成長ができると思います。

大堀――平田さんには、もう少し具体的に戯曲に対しての思いを伺ってもよろしいでしょうか。

平田――刑務所内、しかも全員死刑囚、それもBC級戦犯という不条理極まりない状況のお芝居で、最初は大丈夫かな、お客さまにどう届くのかなと思いました。でも、とても人間的な人たちばかりで、A級ではなくBC級で、偉そうな人は誰もいない。しかもそんな意識もなく収容されている人たちなので、共感できるし、そこであがいている人たちに、胸を打たれました。そういうところが素直に演じられればいいなと思いました。僕は60代です。この歳で戦争に行っている人。しかも全然偉くない、「いいのかな?」と思うタイプの人がいるのも面白いです。今更純粋な若者の役は絶対できないので、結構酸いも甘いも噛み分けた、そういうおじさんとかお父さんの役だったら、僕の演る意味もあると思っています。

大堀――鄭さんの作品の根底にあるのは生きている市井の人々を描くということかもしれないですね。

鄭――僕が今まで書き続けてきたのは、歴史に翻弄され、歴史の波の中に消えてしまいそうな人たち。でも、その人たちも確かに生き、そこにいたことを留めておきたい。それを戯曲とし、演じていただくことで、お客さまの胸に残っていくことが演劇の大きな役割だと思います。僕自身がマイノリティの立場なので、ハイソサエティーな人たちの話を書けない。庶民の人たちの視点から物語を紡いでいくしかないと思っています。

大堀――俳優のお二人に鄭さんの魅力を伺えますか。

平田――鄭さんのお芝居や、書いたものを拝見して、優しさをいつも感じます。今回も本当にむさい男たちの悲惨な話ですが、とても美しい、詩的なところが感じられます。理屈よりも、人間の本来持っているものに触れるというのが、芝居という芸術の良さ、それがまさに鄭さんの作品にはあると思います。

池内――このお話しをカフェで初めて読んでいたら、もう途中からグッときて、泣いてしまって、それ以上読めず、最後のほうは読まずに稽古場で感じながら演っていこうと決めたのですが、やはり始まる前はちゃんと最後まで読まなきゃいけない。読んだらやはり、もっともっとよくて、いろいろ感じることができた。なので、ほんとに皆さん楽しみにしていてください。

大堀――締めの言葉をいただけたらなと思います。

平田――心して稽古に入ろうと思っています。大変な稽古になると思いますが、この年齢で、こんな兵隊の役を演ることはまずないし、今までにやり残したひとつがこういう兵士の物語だと思うので、とても楽しみです。

池内――精いっぱいこの南星という役を演じきって、皆さんに何か伝えられたらいいなと思っています。僕も若いですが、若い人に、来ていただきたいです。

大堀――では最後に鄭さんお願いいたします。

鄭―― 2010年にこの作品を韓国で初演した時から、日本の皆さんにお届けしたいなと願っておりました。それが実現する運びになり、感無量といいますか。心に残る作品の一本になれれば、ほんとにありがたいと思っています。どうぞ皆さん足をお運びください。

●豊橋の皆さまへのメッセージをいただきました。

鄭――戦争というものを声高に反対するのではなく、その中で繰り広げられる愛情であったり、友情であったり、そういったものを感じていただければと思います。

池内――死に向かってはいるが、それを突き抜けて生きる様というか、南星の強さが、しっかりとこの芝居の中で出せたらいいなと思っています。

平田さんは、この春から新しい立場でPLATとお付き合いすることになりますが、そういうことも含めてこのお芝居にかける意気込みをお願いします。

平田――僕が関わった舞台で、豊橋とか東三河の方々にこんな芝居もあるよと、ほんとに小さい桟敷だけの劇場から、小さい劇場、大きい劇場。いろんなお芝居、いろんな作家や演出家の方、共演者の方とPLATで演れた。それだけで、ひとつ役目を果たせたかなと思っています。今回は、そういう意味では集大成というか、とても大切にしたい作品だと思っています。

鄭 義信［ちょん・うぃしん］／1993年に『ザ・寺山』で第38回岸田國夫戯曲賞受賞。映画界では98年『愛を乞うひと』でキネマ旬報脚本賞、日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第一回菊島隆三賞などを受賞。新国立劇場では『たとえば野に咲く花のように』『アジア温泉』の作、『焼肉ドラゴン』『パーマ屋スミレ』の作・演出を務め、『焼肉ドラゴン』で、第16回読売演劇大賞優秀演出家賞、第12回鶴屋南北戯曲賞、第43回紀伊國屋演劇賞、第59回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。2014年春、紫綬褒章受章。

池内博之［いけうち・ひろゆき］／1997年、ドラマ『告白』でデビュー。2004年『髑髏城の七人～アオドクロ』で初舞台。その後は蜷川幸雄、松尾スズキ、野田秀樹、栗山民也らの作品に次々と出演。ドラマ、映画、演劇、舞台と他ジャンルで活躍。香港映画『イップ・マン序章』、日中合作映画『スイートバニー・チョコレート』など、外国作品への出演も増え、アジアへと活動の場を広げている。最近の主な出演として、舞台『禁断の裸体』、映画『レイルロード・タイガー』、映画『マンハント』など。

平田満［ひらた・みつる］／早稲田大学在学中、「つかこうへい事務所」旗揚げに参加。1982年、映画『蒲田行進曲』で第6回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞等多数の映画賞を受賞。2001年『ART』と『こんにちは、母さん』で第9回読売演劇大賞最優秀男優賞、14年『失望のむこうがわ』と『海をゆくもの』で第49回紀伊國屋演劇賞個人賞受賞。06年に企画プロデュース共同体「アル☆カンパニー」を立ち上げ、精力的に活動中。最近の主な出演として『荒れ野』、映画『光』、テレビ『西郷どん』など。

TOPICS

4月11日［水］18:30開演
作・演出＝鄭 義信
出演＝池内博之、浅野雅博、尾上寛之、丸山厚人、平田 満ほか
会場＝PLAT主ホール

「赤道の下のマクベス」

INTERVIEW : 2

今、最も熱い注目を浴びる劇作家・演出家が
一ヶ月間北九州に滞在し、新たな「街と人」の物語を紡ぐ。

やはり人を書くことで街を描きたい。

作・演出 桑原裕子

桑原さんにとって、タイトルの『彼の地』とは、どのような印象なのですか。

桑原――この地とか、その地とか、あの地というふうに、この場所は「その場所」と、具体的に思うような場所と違って、心の中の地というか。例えば遠くの行きたい場所だったり、故郷のように思う場所だったり、そういう思いをはせる場所のことをイメージしていて、初演のときは男の子が主人公だったので「カレの地」というイメージもありました。

一つの言葉でいくつかの意味合いに取れるような言葉を目指して書いているところがあります。今回の『彼の地Ⅱ』は、サブタイトルが「逢いたいひ、と。」になっていますが、これも二つの意味を持っています。言葉通りの「逢いたい人」であるということと、その時その場所で「逢いたい日」とか、かの地で待ち合わせをしようとなったときの「逢いたい日」、忘れられない一日という意味合いも込めています。そういういくつかの意味を込めて始めるのが好きということがありますね。

今回も、北九州で滞在中に経験したことがベースになった話なのでしょうか。

桑原――『彼の地』という物語のベースは、その街に住む人たち、街から出ていく人たち、あるいは新たにその街に来た人たちという、人が入れ替わって、いろんな人たちで街を作っている「北九州」という街を書きたいというのがありました。私は人々の生活に触れて書くスタイルが多いので、やはり人を書くことで街を作れないかというところが始まりです。

北九州には9年ぐらい前からいろんなお仕事で来させていただいているのですが、7年前に、たまたま旅公演中、おでんの屋台で一緒になったサラリーマンの人に「就職鉄道にのって、やってきた会社を今日退社したんだよ」「送る言葉をもらってきたから、役者のあんたたち読んでくれよ」と言われたことがありました。そこでその場で、みんなで読んで、その人をお見送りしたという思い出がありました。例えば、そういうちょっとした街の中での出来事を初演のときには入れ込んでいました。それからさらに時が経ち、私と北九州との距離が変わってきているので、今の私の距離感でまた北九州を見ていきたいなと思います。

地域をテーマにすることに意義や面白さは特にありますか。

桑原――私は東京の町田市に住んでいます。ちょっとだけ他に出て一人暮らししたこともありますが、ほぼ町田にいます。そうすると、前回の『荒れ野』もそうなのですが、普段書いている演劇というのは、町田演劇になっているなと思うんです。町田という土地勘が染みついて出ている。でも他の場所に行って、他のにおいを嗅いで、他の生活の感覚に触れ、例えば、自分の街ではこんなにすぐ近くに市場がないなとか、川がないな、海がないなと、新しい土地に行き、別の環境でそこに住む人の生活を新たに吸収していくと、その場所でしか作れないものが生まれます。それを前作の『彼の地』で感じたので。面白いなと思いますね。

まだ構想中だと思いますが、現状では、どのようなお話になりそうですか。

桑原――前作とは全く違う、完全な新作です。例えば前回出てきたメンバーがまた登場とか、そういうことは基本的にないと思います。といって、あったらあったで面白いですが。前作との違いで言うと、滞在先が小倉なので、小倉以外の場所にも取材は行ったのですが、前作はやはり小倉を中心にした話になっていました。今回は門司港とか、若松であるとか、八幡、小倉南区と、いろんな場所を廻りました。そうすると街の色がとっても違ったのです。今度の作品は、願わくは、場所のカラーが全然違う北九州というのも、自分の目で感じたこととして書いてみたいなと思います。

「北九州の街の物語」という設定で作っていく意味はどのようにお考えですか。

桑原――北九州芸術劇場のプロデュース公演をやってほしいと依頼されたとき「別にPR公演みたいなことはしなくていいです。」「別に北九州のいいとこだけを取る必要はないし、こんなにいい街でしょ、みたいな作品にしてほしいわけじゃないんです。」と言われました。

だから北九州のある種、猥雑な部分も書いたつもりです。でも結果的に、北九州の人には自分の街がもっと好きになってくれたらいいなという思いも込めて書いています。舞台を見に来た北九州出身の人が、「自分の街がそこにあった」とか、東京や他の地方に住んでいる人たちが、「自分の故郷を見れてうれしかった」というふうに言ってくれたのもうれしく、そういうふうに見てほしいという思いもあります。『彼の地』というと、遠い場所のイメージがありますが、「自分の街」という思いと、「思いを寄せる街」という意味合いを込めています。北九州の人でなくても、今自分のいる場所から身動きが取れず、どこか別の場所に行きたいなと思っている人や、あるいは自分の街に帰りたいと思う人とか、あとは、新しい街に来て戸惑っているとか。そういう人たちに、「ここにいていいんだ」、あるいは「旅立っていいんだ」と、背中を押すような作品にしたいという思いはありますね。

桑原裕子［くわばら・ゆうこ］／東京都出身、KAKUTA主宰・作・演出・俳優。高校時代に平田オリザ演出『転校生』で女優デビュー。劇団外でも、福原充則演出『俺節』や人気劇団など〜多数出演。11〜13年までブロードウェーミュージカル『ピーターパン』の潤色・作詞・演出を担当。脚本家としては舞台・映像・ラジオ・ノベライズ小説・ゲームシナリオと様々な分野に脚本を提供。09年KAKUTA『甘い丘』再演で第64回文化庁芸術祭・芸術祭新人賞（脚本・演出）を受賞、14年KAKUTA『痕跡（あとあと）』にて、第18回鶴屋南北戯曲賞を受賞。2018年4月より穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化アドバイザーに就任予定。

3月10日［土］14:30開演
11日［日］13:30開演
作・演出＝桑原裕子
会場＝PLATアートスペース
PLAT小劇場シリーズ　北九州芸術劇場プロデュース

「彼の地Ⅱ〜逢いたいひ、と。」

私はしつこく、そしてなれなれしく親しみを持って、全力で『彼の地』を通してその街に向かいますよ。桑原裕子

PLAT小劇場シリーズ　北九州芸術劇場プロデュース

「彼の地Ⅱ~逢いたいひ、と。」

オーディションでキャストを決める意味をお聞きしたいなと思います。

桑原――やはり劇団は、劇団でしかできないことがあります。その一つは、やはり集団力で、例えば同じ言語を持って何年も作っているので、前回にこういう経験をしたから、今回はこうしようとか、劇団がみんなで成長していく面白さとか、息を合わせるだけの年月を持ってきたという感覚があります。そういうことをプロデュース公演でやるのはとても難しいなと思う。ただ、できないわけではない。『彼の地』は、前作にしてもまた今回にしても、一つの劇団のようにチームとして臨みたいと思っています。舞台はやはり一期一会ですから、そのときにしか出会えない人たちがいて。集まったメンバーというのは、オーディションだけれど必然だとも思っている。偶然の出会いを必然にしていくのも舞台の役目だと思います。この人たちにとって、単なる公演の通過点ではないものにするのは一つの目標です。そういうことをみんなで思って作ることができたら面白いなと思います。オーディションではまだ誰のことも知らないから、はじめは劇団みたいには愛情を込めて見られなかったのに、終るころにはかけがえない存在になっていたりする。そういう不思議な現象を、みんなで味わいたいです。

桑原さんにとって小劇場の面白さとはどのようなことですか。

桑原――小劇場はやはり箱の大きさが決められている。最初はそのサイズに合った話を作るのが普通だと思っていました。だけど、演劇を重ねていって、このちっちゃい箱に街を込められないだろうかと、演劇を何年もやってきてようやく思えるようになってきた。そういうふうに、箱が小さいからこそ、どこまでも想像を広げ、挑戦を楽しめるかというのがまずあります。もう一つは、これまで私が書いてきたものには、エンターテイメントに寄せたものももちろんありますし、そういうものも面白いと思いますが、一方で、皮膚感覚でお客さんに感じ取ってもらうようなものを書きたいと、ずっと思ってきました。生の音で伝わってくる小劇場は、ちょっと髪の毛が揺れるだけでもニュアンスが変わってくる。どこまでも世界を広げていける可能性と、そういう皮膚感覚が伝わる距離感が、小劇場の魅力だと思います。

近年の地方の劇場や、舞台の在り方について、どのようにお考えですか。

桑原――私も少し前までは、やはり演劇は東京でやるものだと思っていました。もちろん、大阪とか大都市になってくると、「劇団☆新感線」とか、「南河内万歳一座」という劇団もありますが、中心に出てきてやるというイメージがありました。この『彼の地』で、これだけ才能ある人たちが地方にいて、東京ではない場所でやっているんだと気付きました。「こんなに面白い人たちいるんだ」と衝撃を受け、そういうことをもっとみんな知ったらいい、東京の人たちが刺激を受けるような芝居を地方で作れたらいいなと思いました。今、そういう土壌を作ろうとしている劇場が増えてきたなと思う。北九州芸術劇場も、このPLATもそうです。街の中のアートというか、文化というか、そういうものに興味を持つ人たち、あるいは自覚がなかった人たちも一緒に取りこんで育てていくことに対して、思いを持つ劇場があります。そういう劇場の方々が愛情を持って演劇を育て、街の人たちと文化を育てていこうということは、今、注目されていると思います。だから、東京での演劇に疲れたら、地方に引っ越してやるのも選択の一つだという気持ちもあります。東京でいろんなオーディション受けたり、ワークショップ受けるけど、好きな演劇がないなとか、ただただ焦ってスケジュールを埋めようとしてしまう俳優がいるならば、「じゃあ北九州に行って演劇すれば」と思います。そういう劇場が出ていることを、東京の人にもっと知ってほしい。

豊橋の印象というのはいかがですか。

桑原――劇場とホテルの行ったり来たりですから、正直言ってまだわからないです。街の土地柄を知るほど、人と触れ合えてもいない。でも、あまり焦ってはいません。北九州の話を書いた時も、依頼を受けて、初めてその街を知ろうとして、徐々に徐々に愛着が染みついていきました。今よそ者の目線で豊橋に関わらせてもらっていることは、むしろ楽しく、ちょっとずつ触れていければいいなと思います。この土地について、まだわかったように言いたくないという気持ちもあります。だからもっと教えていただく機会がほしいなというのが、正直な気持ちです。

最後に豊橋のファンの人にお伝えしたいことを一言お願いします。

桑原――『彼の地』のときも何も知らずに飛び込み、その場所の人たちに、方言にしても、土地柄にしても、その人たちのキャラクターというか、その街の色というものを教えていただいて知っていくことができました。私がこれから芸術文化アドバイザーとして関わらせていただくならば、単にお客さんとしてではなく、そのようにしてこの街を知っていきたいと思っています。『彼の地』はその一つの結果として見ていただければ、いかに私がしつこく、そしてなれなれしく親しみを持って、全力でその街に向かいますよということが『彼の地』を通して豊橋の人たちに伝わるのではないかと思います。

ぜひその覚悟を観にいらしてください。ウフフ(笑)。

速報！『荒れ野』が第5回『悲劇喜劇』賞受賞

撮影:伊藤華織

穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース『荒れ野』が、第5回ハヤカワ『悲劇喜劇』賞（主催：早川書房／公益財団法人 早川清文学振興財団）を受賞しました。

本賞は、選考委員と批評・評論家の劇評意欲を最も奮い立たせる優秀な演劇作品を顕彰するもので、受賞作はその年に上演した作品のなかから1作品にあたえられます。

『荒れ野』は、桑原裕子が作・演出を務め、プラット開館5年記念事業として11月～12月にかけて豊橋、北九州、東京で上演しました。

北九州、東京と旅して豊橋にやってくる桑原裕子の最新作『彼の地Ⅱ』にもご期待ください！

INTERVIEW：2

撮影：木寺一路

今年2018年に25周年を迎える人気劇団ナイロン100℃がPLAT初登場！

ナイロン100℃ 45th SESSION

「百年の秘密」

5月8日［火］18:00開演／9日［水］13:00開演
会場＝PLAT主ホール
作・演出：ケラリーノ・サンドロヴィッチ
出演：犬山イヌコ、峯村リエ、みのすけ、大倉孝二／萩原聖人、泉澤祐希、伊藤梨沙子、山西 惇ほか

二十五周年を記念して、二〇一八年は、近年の劇団公演の中では抜きん出た一作。

どうしても再演したかった。

作・演出 ケラリーノ・サンドロヴィッチ

聞き手・田中里津子

ケラリーノ・サンドロヴィッチ／東京都出身。1982年にニューウェイブバンド・有頂天を結成。また自主レーベルであるナゴムレコードを立ち上げ数多くのバンドのアルバムをリリースする。93年にはナイロン100℃を始動。99年に第43回岸田國士戯曲賞を受賞、現在は同賞の選考委員。2016年の3本の舞台活動に対し、第24回読売演劇大賞最優秀演出家賞、第68回読売文学賞戯曲シナリオ部門、第51回紀伊國屋演劇賞個人賞、第4回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞（『キネマと恋人』）を受賞。

INTERVIEW：3

2018年、劇団結成25周年を迎えるナイロン100℃。その記念公演の第1弾『百年の秘密』は主宰のケラリーノ・サンドロヴィッチ（以下、KERA）が“どうしても再演したかった”思い入れの強い作品だという。KERAにこの25年間のこと、そして『百年の秘密』再演についてを訊いた。

――この25年間で、KERAさんにとって特に印象深かった作品、節目になった作品は。

KERA――いっぱいありますよ。節目だらけです。うまくいかなかったことで印象深いものもあるし、思いの他よくできたことで憶えている作品もあるし、お客さんがいっぱい入ったというのもあるしその逆もある。どれかを選べと言われても、ちょっと困っちゃうな。

――25年の間には、大量の作品を上演されていますし。

KERA――しかも、ある時期まで本当に多作でしたから。今はめっきり減りましたけど。旗揚げから10年弱は本公演に加えてSide SESSIONも入れると、年間7本やっている年があったくらいです。

――ちょっと信じられない本数ですよね。そして、やはりナンセンスコメディがあれば、物語が中心の作品もあり、岸田國士さんなど他の方の戯曲を使ったオマージュものがあったりと、作品によっていろいろなジャンル、カラーが存在するというのもKERAさんの作品の面白いところなのかなと思うのですが。

KERA――そうですね。そのせいで、この劇団がどういう芝居をやっているのかがわかりにくかったかもしれない。初めてウチの公演を観て「いいな」と思ってもらえても、次の作品を観に来てみたら「この前観たのと全然違って好きになれない」と思う人もいたでしょうし。だけど、今でもそうですけど、なんでもできるからなんでもやっているわけではないんです。毎回、できるかどうかはわからないんだけどやってみてるんですよね。だから毎回が挑戦なんです。まあ、いずれにせよ、こんなにいろいろなジャンルのものを書いている劇作家って、他にいないとは思います。

――確かに、いないと思います（笑）。そして今後もやはり、こういうペースで劇団活動は続けていくおつもりですか。

KERA――今の時点では具体的なことはわからないです。現在も決まったペースではないですし、イヤになったら、その時は辞めちゃったほうがいいとも思うんで。とはいえ解散しそうな理由がとくに見当たらないんですよね、今のところ。こうして本公演を、次は45回目ですが、ここまで長く続けてこられたんですからね。若い頃は、稽古をして初日が開き千秋楽を迎えるってことが当たり前のように思えていましたけど、年々、1本の芝居を最後まで無事にやり遂げるというのは奇跡的なことなんだなと思うようになりました。

――その45回目の劇団公演が『百年の秘密』の再演です。今回、25周年記念でこの作品をやりたいと思ったのは？

KERA――25周年でなくても別に良かったんですけど、とにかくこの作品はどうしても再演したいと思っていたんです。

――それが、たまたまこのタイミングに重なったと？

KERA――そうですね。「本当にどうしても再演したい」という作品は劇団ではこれが最後の1本かもしれない。これまでも『消失』とか『わが闇』とか『ナイスエイジ』とか『カラフルメリィでオハヨ』とか、いくつかの作品を再演してきましたが、今のところ最後の1本です。今のところ、ですけど。

――その理由としては。

KERA――なんですかねえ。ま、好きな作品なんですよ。自己評価が高い。

――お客さんの評価も。

KERA――高かったですね。でも明確な理由はないんです。実はお客さんに歓迎されているからという理由も、それほど大きくはないんですよ。きっとこの作品が全然ウケていなかったとしても、もう一度やりたかったと思う。ただ、僕は犬山イヌコと峯村リエ、このふたりが絡むシーンが大好きなんです。そして、このあとやる新作（『睾丸』（仮題））は三宅（弘城）とみのすけを中心にしようとしていて。つまり劇団の創成期を支えてくれた俳優たちをちゃんと立たせた決定版みたいな、それぞれにとっての代表作をここでもう1本増やしてあげたいっていう気持ちもありました。

――基本的には、初演と大きく変えずに再演する予定ですか？

KERA――若手のキャストが何人か初演と入れ替わるので、それで少し変わるところもあると思いますけど、基本は変えるつもりはありません。一応このあと、じっくりDVDと台本とにらめっこして、どこか変えるべき点があるかどうかを吟味しようと思ってはいますけど。今まで再演したものも、初演とあまり変えていないんですよ。そういう作業をしても、変えないほうがよかったって結論になることが多いので。

――では最後にKERAさんからお客様へ、『百年の秘密』へのお誘いメッセージをいただけますか。

KERA――ふたりの女性の何十年にもわたる関係の物語です。同時にふたりの周囲の人々を巡る紆余曲折の群像劇でもある。見応えという意味では劇団史上最高かもしれません。そして、お客さんたちひとりひとりが歩んだ人生とも、どこかでつながるものが必ずある作品だと思います。自分で言うのもなんですが、作家としてはここまでの作品は人生に何本も書けるものではないと思う。そしてもう、このメンバーでの次の再演はおそらくないでしょう。ですから未見の方はもちろん、DVDでしか観ていない方もぜひ生で、劇場で体験していただきたいなと思います。

INFORMATION

PLAT主催公演情報

託児サービス対象公演
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

マイセレクト4　マイセレクト4 **マイセレクト4 対象公演**

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター
◉劇場窓口・電話0532-39-3090［休館日を除く10:00ー19:00］
◉オンラインhttp://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］

U24・高校生以下割引ご案内 ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
◉料金＝U24［24歳以下対象］：公演ごとに指定する席種の半額／高校生以下：一律1,000円
◉購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
◉その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

劇団四季「ジーザス・クライスト＝スーパースターエルサレム・バージョン」

「シャンハイムーン」

広末涼子　野村萬斎

とよはしアートフェスティバル2018　大道芸inとよはし

ナイロン100℃「百年の秘密」

ケラリーノ・サンドロヴィッチ

「春風亭小朝 独演会」

PLAT小劇場シリーズ　FUKAIPRODUCE羽衣

糸井幸之介　深井順子

プラットワンコインコンサート

竹田江梨子

3/3［土］・4［日］14:30開演
市民と創造する演劇
「とよはしの街の物語」　好評発売中
●作・演出・音楽＝糸井幸之介●ドラマトゥルク＝木ノ下裕一●出演＝オーディションで選ばれた一般市民●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般2,000円ほか

3/8［木］19:00開演・**9［金］**14:00開演
劇団四季
「ジーザス・クライスト＝スーパースター エルサレム・バージョン」　好評発売中
キリスト最後の7日間を描く、劇団四季ミュージカルの原点と言える本作の限定ツアー公演です。●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席8,640円、A席6,480円、B席3,240円※3歳以上有料（3歳未満の着席観劇有料）

3/10［土］14:30開演・**11［日］**13:30開演
PLAT小劇場シリーズ
北九州芸術劇場プロデュース
マイセレクト4
「彼の地Ⅱ～逢いたいひ、と。」　好評発売中
●作・演出＝桑原裕子●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般3,000円ほか

3/23［金］18:30開演
3/24［土］12:00開演／17:00開演
24日12:00のみ
「シャンハイムーン」
●作＝井上ひさし●演出＝栗山民也●出演＝野村萬斎、広末涼子、鷲尾真知子、土屋佑壱、山崎 一、辻萬長●会場＝PLAT主ホール
●前売予定枚数終了：今後の発売についてはお問合せ下さい。

4/11［水］18:30開演
「赤道の下のマクベス」　好評発売中
●作・演出＝鄭義信●出演＝池内博之、浅野雅博、尾上寛之、丸山厚人、平田満ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席5,500円、A席4,500円、B席3,000円ほか

5/4［金・祝］・5［土・祝］
とよはしアートフェスティバル2018
大道芸inとよはし
ゴールデンウィークは豊橋に大道芸がやってくる！世界で活躍する大道芸人たちが市内各所を劇場に大変身させます。●会場＝PLAT、豊橋駅南口駅前広場、広小路通りほか●料金＝無料
【ボランティアスタッフ大募集】
『大道芸inとよはし』を一緒に盛り上げてくれる仲間を募集します！
●日程＝5月4日（金・祝）・5日（土・祝）●業務時間＝10:00～18:00を予定●参加条件＝18歳以上で事前説明会に参加できる方●事前説明会＝4月20日（金）・21日（土）●会場＝こども未来館ここに※詳細は決まり次第、劇場ホームページなどで告知させていただきます。

5/8［火］18:00開演・**9［水］**13:00開演
ナイロン100℃ 45thSESSION
「百年の秘密」　好評発売中
●作・演出＝ケラリーノ・サンドロヴィッチ●出演＝犬山イヌコ、峯村リエ、萩原聖人、山西惇ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席5,000円、A席4,000円、B席3,000円ほか

5/20［日］13:00開演
「1984」
ジョージ・オーウェルの傑作小説を原作に、監視社会の恐怖を描いた意欲作。演出は、2016年9月に新国立劇場演劇芸術参与に就任した小川絵梨子が務めます。●原作＝ジョージ・オーウェル●脚本＝ロバート・アイク、ダンカン・マクラミン●翻訳＝平川大作●演出＝小川絵梨子●出演＝井上芳雄、ともさかりえ、大杉漣ほか●会場＝PLAT主ホール●前売予定枚数終了：当日券については5月以降にお問合せ下さい。

5/27［日］13:30開演
「春風亭小朝 独演会」
ドラマ出演や音楽界とのコラボ、プロデュースなど幅広い分野でその才気を発揮している小朝師匠が今年もプラットに登場！●会員先行＝3月3日（土）●一般発売＝3月17日（土）●出演＝春風亭小朝●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般3,500円、ユース（24歳以下）2,500円

「赤道の下のマクベス」

6/2［土］・3［日］14:30開演
PLAT小劇場シリーズ
FUKAIPRODUCE羽衣
マイセレクト4
「春母夏母秋母冬母」
市民と創造する演劇『とよはしの街の物語』で作・演出・音楽を務める糸井幸之介のカンパニーが初登場！ 妖艶かつ混沌とした詩的作品世界、韻を踏んだ歌詩と耳に残るメロディが印象的な、唯一無二の"妙一ジカル"を二人芝居でお届けします。●会員先行＝3月3日（土）●一般発売＝3月17日（土）●作・演出・音楽＝糸井幸之介●出演＝深井順子、森下亮●会場＝PLATアートスペース
●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般3,000円ほか

6/29［金］19:00開演・**30［土］**16:00開演
7/1［日］13:00開演
「マクガワン・トリロジー」
松坂桃李ら豪華キャスト陣と新国立劇場演劇部門次期芸術監督の小川絵梨子演出によりお届けする意欲作。IRAの殺人マシーンとなったゴールウェイ出身のヴィクター・マクガワンの三年の歳月を描いたコメディータッチの悲劇にご期待ください。●会員先行＝3月25日（日）●一般発売＝4月15日（日）●作＝シーマス・スキャンロン●翻訳＝浦辺千鶴●演出＝小川絵梨子●出演＝松坂桃李、浜中文一、趣里、小柳心、谷田歩、高橋惠子●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席8,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか※発売日初日は、お一人様一申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

7/8［日］16:00開演
チャボロ・シュミット
「ジプシー・ジャズ・ギターコンサート」
ジプシーの情熱と、スウィング・ジャズの軽妙洒脱さを併せ持つギターの音色と、目にも止まらぬ世界最高峰の指さばきで高い人気を誇るチャボロ・シュミットによる1920年代のパリを賑わせたお洒落なギター・ジャズのコンサートをお届けいたします。●会員先行＝3月31日（土）●一般発売＝4月21日（土）●出演＝チャボロ・シュミットほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般4,000円、ユース（24歳以下）2,000円ほかセット券有り。

7/15［日］12:00開演／16:30開演
平成三十年度（公社）全国公立文化施設協会　主催 東コース
「松竹大歌舞伎」
尾上菊之助の『御所五郎蔵』『高坏』ほか。当日はプラット茶屋の開店や特製弁当の販売など、劇場が丸一日歌舞伎小屋に変身！●会員先行＝4月7日（土）●一般発売＝4月22日（日）●出演＝尾上菊之助ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席10,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか※発売日初日は、お一人様一申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

7/22［日］12:00開演／17:00開演
7/23［月］13:00開演
ミュージカル・コメディ「キス・ミー・ケイト」
松平健が再びプラットに登場！豪華な出演者がお贈りする、歌にダンス、笑いも満載！ハッピーエンドでお楽しみいただけるミュージカル。シェイクスピアの喜劇「じゃじゃ馬ならし」を劇中劇に仕立て、舞台裏と交互に見せる「バック・ステージ・ミュージカル」の傑作です。●会員先行＝4月21日（土）●一般発売＝5月12日（土）●作詞・作曲＝コール・ポーター●脚本＝ベラ&サミュエル・スピワック●訳詞＝なかにし礼●翻訳＝丹野郁弓●演出・振付＝上島雪夫●出演＝松平健、一路真輝ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般5,000円、ユース（24歳以下）2,500円※発売日初日は、お一人様一申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付］各回500円
4/20［金］14:00開演
「グロトリアンで奏でるドイツ三大Bの響き」
竹田江梨子（ピアノ）●会員・一般同時発売2月28日（水）
■関連企画
3/16［金］14:00開演／17:00開演
連弾 二台ピアノコンサート**「デュオの世界へ」**
白井那奈（ピアノ）、長澤優花（ピアノ）●会場＝PLATアートスペース
●料金＝無料（要整理券。PLAT1階窓口にて配布）

FOYER

ワークショップファシリテーター養成講座のこと

柏木陽（ワークショップファシリテーター養成講座講師、演劇百貨店代表、演劇家）

毎年プラットでは「ワークショップファシリテーター養成講座」という講座が行われている。ファシリテーターというのは成長を促進させる人というような意味で、ワークショップと呼ばれる活動を中心になって進めていく人もしくはそのような行為をファシリテーターもしくはファシリテートと呼ぶことがある。と、この場では思ってください。

この講座は前期と後期に分けられていて、前期が主に子どもとどのように遊ぶ場と時間を創り出すことができるかを考え実践する場所になっていて、後期は「まちに聞く、考える」という事業名が示すよう、まちに出て気になる場所や人や現象を拾いそれらを演劇化することを目的にしている。

一見するとこの後期の講座は演劇を作るだけのように見えている。いや、実際そうなっているところも多くあったりはする。しかし今年は劇的な進化を遂げた。過去の参加者の人たちがこの後期の進行を中心的に行ったのだ。言ってみればファシリテーターとして歩き始めたと言っても良い。

もちろん劇場からも以前からの講師もサポートに回り、時に励まし時に強烈なダメ出しを行いながら伴走した。初めて参加した人にはこの多重構造のワークショップは理解しにくいものだったかもしれない。改良の余地は大いにあるもののこの状態は豊橋というまちにとっても大きな変化だと思う。この多重構造が回り始めると参加者からファシリテーターへ、ファシリテーターから指導者へのサイクルが見え始めたということだと思うのだ。東京や大阪からやってきた特別な人たちから何かを教えてもらう状態から違う次元の状態に移行するということだ。

劇場という場所がともすると東京や大阪などの大都市圏の文化や芸術を享受するための場所だという認識が多くの人にあるように思う。そうではない。劇場というのは自分たちの住むまちに何がありどんなことになっているのかを考えそこから自分たちにしか創り得ないものを生み出しお互いにそれらを確認したり異議を唱えたりする場所なのだ。ファシリテーター養成講座という事業がその自分たちにしか生み出せない何かを生み出す場になりかかっていると思うと嬉しくて仕方がない。

しかし、一般の参加者の人たちと講座を指導する講師の間に挟まれた人たちは本当に大変だったと思う。人と接する活動だから知識を教えてもらって理解したらできるというようなものではない。先生に教え下手な人がいたり、教えてもいないのにマッサージがうまい人がいるみたいに人と接する部分はとても繊細で難しい。しかも講師陣は古いタイプの教え方しか知らない人たちである。言わば弟子入り制度のような状態でマンツーマンでダメが飛ぶ。（ダメとは良くないところや出来てないところを指摘されることです。）

しかも今自分が何かをやっている状態というのは客観的に見ることができないので、なにが良くてなにが悪いのか暗中模索の大混乱。よく最後まで投げ出さずに辿り着いたものだと感心する。彼らがファシリテーターの指導者になるまでにはまだまだかかるだろう。でも確かな一歩が踏み出せたのではないかと思っている。

ESSAY

芸術文化アドバイザー

平田 満の ちょこっとエッセイ

最終回「よろこび」

最後の「ちょこっとエッセイ」になりました。恥ずかしながらプラットニュースの巻末でお目を汚し続けて5年、長い間本当にありがとうございました。経験も教養も乏しい私が、400字～800字とはいえ、よくぞ27回も締め切りを守って書いたものだと思います。演劇という役に立つのか立たないのかよくわからないことをし、いてもいなくてもいいような職業の筆頭である俳優をしている自分は、のらりくらりとキリギリスのような人生を終えるだろうと思っていたら、芸術文化アドバイザーなどという得体のしれないものを仰せつかったために、この年になって愚にもつかない文章を青息吐息で書く破目に陥るとは、ほんとうに皮肉なものです。きっと何かの罰でも当たったのでしょう。

しかし、劇場や舞台の魅力や面白さ、一瞬に消えてしまう舞台芸術にも意味のあること、どんな人にも感動やよろこびを味わってほしいことなどを、拙いながら精いっぱい書いてきたつもりです。ほんの少しでも皆さんに伝わっていたら幸いです。

今読み返してみると、飽きもせず繰り返し何度も同じフレーズを使っていることに気がつきました。それは「よろこび」という言葉です。プラットニュース創刊号の挨拶でも、2012年の準備号の巻頭でも、プラットのホームページでも、「よろこびを感じる劇場」とか、体験のよろこび、発見のよろこび、表現のよろこびなどについて語っています。呆れるほどひとつのことしか言ってこなかったんだなあと改めて思います。

そこで、しつこいようですが最後にもう一度…。

プラットがいつでも、いつまでも「よろこび」に満ちた劇場であるように。舞台を見る人、出る人、かかわる人が、常に「よろこび」を感じられるように。そしてあらゆる人が、それぞれの「よろこび」を見つけられるよう、切に願い、望み、祈ります。

だって「よろこび」は自分とは何かを教えてくれ、生きていることを実感させてくれ、世界と自分をつないでくれる、「生きるよろこび」なのですから！

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

有限会社 魚伊
電話52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役　竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

Gallery 48
呉服町48 TEL.54-4848

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科　婦人科（不妊治療）
豊橋市新本町23 豊橋 竹内産婦人科 検索Q

ケンキク クロノ
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

看板広告　アラキスタヂオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

医療法人慈豊会
大島整形外科クリニック　院長 大島 毅
東田町井原39の7（市電赤岩口終点前）電話62-5511(代)

ONOCOM 株式会社 オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・消化器科・呼吸器科
伊藤医院　伊藤之一　伊藤文二
豊橋市小池町字原下35　電話45-5283（代）

創業文政年間
日本料理 きく宗
豊橋市新本町40　電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2　TEL53-2809

豊橋銀行協会（順不同）
三菱東京UFJ銀行　みずほ銀行　静岡銀行　名古屋銀行
三井住友銀行　三井住友信託銀行　清水銀行　第三銀行
十六銀行　愛知銀行　中京銀行　大垣共立銀行

御茶庫菓子専門店
若松園
御菓子司　創業江戸

気まぐれコンサート
事務局／0532-62-9259（小川恵司）

安心・安全な地下駐車場
パーク500
ソノの親子の看板が目印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円（上限4時間まで）に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
塩之谷整形外科
院長 塩之谷 昌　副院長 塩之谷 香
豊橋市植田町関取54　電話0532-25-2115（代）

豊橋名産 ちくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間　月・火・木・金 10:00～13:00 16:00～19:00
土 10:00～14:00　休診日＝水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久　豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本の豊川堂
本店54-6688番／カルミア店55-2810番／アピタ店54-6351番

練物専家
ねりや花でん
ココラフロント ホテルアークリッシュ 1F

ISO 9001　ISO 14001　愛知ブランド企業　認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

JEANS SHOP YAMATO
豊橋 つつじが丘 ／ 豊川 千歳通り

生活にファインクオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ

プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090［休館日を除く10:00ー19:00］
オンライン
http://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］

プラットフレンズ募集 入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、
若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24［24歳以下対象］：公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下：一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810［代表］
開館＝9:00ー22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅（JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道）、
新豊橋駅（豊橋鉄道渥美線）直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT